

まだ見ぬ図書館へ

—— 金森修先生蔵書整理の記録 ——

奥村大介

研究室紀要 第43号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2017年7月

まだ見ぬ図書館へ

——金森修先生蔵書整理の記録——

奥村大介

この不思議な図書室は、稀覯の書物や珍奇な稿本や未知なる文献の宝庫であった。
ヴィリエ・ド・リラダン『イシス』

はじめに——1万冊を超える蔵書

金森修先生はご自宅の書斎のほかに、東京大学教育学部棟の3箇所にご蔵書を保管されていた。まず先生の研究室である4階407室。その隣に位置する共同利用の書庫408室。そして、同じく共同利用の書庫である3階354室。3部屋合わせて、幅900mmの書架の棚段数として約350段に本が納められており、1段あたり50冊前後の本が納められていた。書架のほかにも、3部屋の随所に置かれた段ボール箱や、床から平積みされた本の山などがあり、正確な冊数を特定することは困難であるが、概算で15000冊から20000冊程度の蔵書が東大にあったはずである。

2014年7月にご病気が発覚した先生は、その後、2年近くに亘って断続的な入院加療を伴う懸命の闘病を続けられたが、2016年4月後半頃より病状がいよいよ重篤になり、ほどなくして最後の入院生活に入られた。折しもこの頃、教育学部棟は建物の耐震補強工事を行なうため、棟内のすべての部屋を一旦完全に退去する必要があり、金森先生のお使いになっていた3部屋も例外ではなかった。先生が入院されているなか、膨大な書籍や資料類を一時退避させる作業が必要となった。この作業の準備をしているさなかの2016年5月26日、金森先生は逝去された。「書籍類の一時移転」という目的で開始された作業は、「遺されたご蔵書を、持ち主の亡き後、どう扱うか」という問題の検討へと一変した¹⁾。

1. 金森先生のご意向

金森先生は2016年春頃から、ご自身に残された時間が長くないことを自覚されていたようである。そ

してご蔵書を後進たちの研究に生かしてほしいと願ひ、すべての蔵書を一括して東京大学附属図書館(本郷の総合図書館)に寄贈し、あとは図書館側が蔵書すべきものを取捨選択するだろうが、全体の半分程度は収蔵してくれるとお考えだった。金森先生から同僚の小国喜弘先生(東京大学大学院教育学研究科教授)に、そうした前提で、図書館に電話をかけてくださるように依頼する通信が残っている。

しかし実際に金森先生のご意向をそのままの形で実現するには多くの困難があった。

まず、金森先生の蔵書は、性質からすれば、そのすべてを一箇所に保管し、〈金森文庫〉とするべき価値を確実にもつ、極めて独自性の高いコレクションである。そのなかにはフランス科学認識論を中心に、日本国内の大学・公共図書館に収蔵されていない書籍が多数含まれている。また、他に蔵書がある一般的な書籍類であっても、当代希有な脱領域的知性であった金森先生が研究・著述・教育のためにどのような書籍を集め、どのように読み、どのように保管していたのか、その蔵書の全容や保管されていたときの配列、本文頁への書き込みなどが、現代日本における科学思想史研究——あるいは科学思想史研究の歴史、すなわち〈科学思想史-史〉——のための重要な資料となる。傑出した科学思想史研究者の蔵書全体は、類例のないコレクションなのである。

だが、すべての蔵書を一箇所に集めた〈金森文庫〉のようなものを作ることは現実的には不可能であった。金森先生が寄贈先に指定されていた東京大学附属図書館には、それを実現するスペースがない。本郷キャンパスの総合図書館は、2016年5月時点でも(本稿執筆中の2017年5月時点でも)書籍収蔵面積を確保することを目的の一つとした拡張・改築工事が

進行しており、とにかく場所がないのである。そして工事にともない蔵書は柏地区などに一時移転されており、のちに取捨選択するとしても一時的にであれ1万冊を超える書籍をいちどきに受け入れることは到底できない。これは仮に本郷の総合図書館でないとしても、どこの大学の図書館でも同じことである。

金森先生のご葬儀（2016年5月29日に通夜、30日に告別式）が終わって間もない時点で、小国先生と私のあいだで蔵書の扱いについての会合が持たれた。金森先生とご家族の意向を極力尊重することを前提として、いろいろな案が検討されたが、結論としては、「全蔵書の寄贈は無理でも、一部でも総合図書館に寄贈することが金森先生のご遺志に合うだろう。残りはご家族に委ねるべきであろう」ということになった。

2. 図書館との交渉

この方針を実現するためには、まず図書館側に事情を説明し、蔵書の一部（とくにフランス科学認識論関係を中心に、国内で金森先生のほかは持っている図書館が少ない重要書目を中心に）寄贈を受け入れていただけるよう相談しなければならない。そのための準備として、私はまず3部屋の蔵書をすべて調査し、蔵書の全体的傾向をレポート（「金森修先生研究室蔵書の概要についての報告」）にまとめた。同時に、総合図書館への窓口となっていた東京大学教育学部図書室の上田春江係長（当時）らに3部屋をご覧いただき、私から概要の説明を行なった。

そして、教育学部図書室のご尽力により東京大学附属図書館長・久留島典子先生との面会が叶うこととなった。2016年6月9日、小国先生と私は上記のレポートを携え、附属図書館長室を訪ねた。久留島先生ほか図書館職員の方々にご対応いただき、小国先生が丁寧に状況を説明され、私が若干の付帯の説明を行なった。図書館側からは以下の条件を提示していただいた。

- ①寄贈を受ける書籍は本郷の総合図書館に収蔵されていない書目に限り、1000点程度とする。
- ②書籍現物だけでなく、その書誌情報をリスト化したものを添付する。
- ③書籍の受入は2021年となる。それまでは教育学部で保管する。

④受け入れた書籍は、一箇所に〈金森文庫〉のような形でまとめることはできず、内容に即して分類・配架される。ただし、各書籍に〈金森修教授寄贈〉の印を捺し、データ上でも金森先生寄贈書であることがわかるようにする。

この条件は、金森先生のご意向を完全に満たすものではないが、図書館としては最大限に意を汲んでくださったご対応で、現状でとりうる最善の近似解であった²⁾。この条件に小国先生は承諾され、以後、これに沿った方針で蔵書を整理することが決まった。

3. 選書、書誌情報の記録、箱詰め

先述のとおり、教育学部棟の耐震補強工事の日程が迫っており、時間をかけて蔵書を点検し、図書館寄贈対象を選んでいく余裕はなかった。蔵書は、その後の行先がどうなるのであれ、とにかく6月下旬までに箱詰めし、搬出可能な状態にしなければならなかった。そして、それに間に合うように、寄贈対象の選定とリスト化を行なわなければならなかった。

小国先生の指揮のもと、次のような方針がとられた。

まず、金森先生と専門領域（フランス系の科学論）を同じくする奥村が、総合図書館に収蔵されていないであろうこと〉を基準にあたりをつけ、寄贈対象を選定する。その書籍の書誌情報（著者名、書名、出版社名、出版年）を記録して、段ボール箱につめる。その際、細かい分類は断念せざるをえないとしても、おおまかに哲学関係とか芸術関係という程度に仕分けした上で、書籍一冊一冊に対して〈登録番号〉を与え、箱に対しては〈箱番号〉を附与し、書誌データとともにリスト化する。例えば、登録番号1から33までの書籍33冊は箱番号1の段ボール箱に収められている。こうしておけば、書籍がどの箱に収められているかがわかる。このような仕方では、図書館に提出する本の選定とそのリスト化、そして箱詰めを並行して行なえばよいわけだが、問題は書籍の量である。全体で15000~20000冊程度、そのなかから1000点ほどを選ぶまではよいが、その書誌データを手作業で記録する時間はとれない。どうするか。

4. ISBN読み取りシステム

私は書店のPOSシステム (point of sales system; 販売時点情報管理)を思い起こした。つまり書籍の裏表紙に印刷されたISBNバーコードをレジで読み取ってその書籍の情報を記録する——どの書籍がどういう期間で何冊売れたのかを把握できる——システムである。しかし、書店用POSシステムのソフト/ハードを調達する時間も予算もない。これに近いことが何とか低予算で実現できないかと考え、当時、情報分析を専門とする企業に勤務していた友人・西澤満理子氏に相談した。実現したいのはISBNバーコードを読み取って、それを最終的に書誌情報のリストとしてExcelファイルに落とし込むことを極力低予算・短時間でこなせるシステム。しかも、バーコード・リーダーがないのでタブレット端末やスマートフォンの読み取りカメラで代用でき、和英独仏西伊の各国語書籍に対応できること。金森先生の著作の熱心な読者でもあった西澤氏はただちに事情を理解して迅速に調査してくださり、相談した翌日には、ウェブ上の無料サービスの組み合わせで完全にこれを実現する方法を詳細にご教示くださった。

その方法はこうである。

- ①ブクログ (<http://booklog.jp/>) という、ウェブ上の仮想本棚をつくるサイトに登録し、ログインして自分のページを作成しておく。
- ②書籍の裏表紙にあるバーコードをタブレット端末 (あるいはスマートフォン) のカメラで読み取る。この時点でISBNデータが採取できる。
- ③ISBNデータをブクログ・サイトにアップロードする。この時点で、ブクログがAmazonの保有するデータに照会し、著者名・書名・出版社名・出版年などの書誌情報が特定され、ブクログ・サイト内の自分のページにその本が登録される。
- ④ブクログ・サイトの自分のページから書誌情報をExcelファイルとしてエクスポートする。これで、Excel上に書誌データが得られる。

読み取り作業としては②と③を書籍の冊数だけ繰り返すことになる。1冊あたり数秒以内にこの工程は完了する。④の作業は、選んだ本が段ボール箱1箱分になるごとに行なえばよい。

書籍1冊ずつに与える〈登録番号〉は、登録順に

自動的に付与される。あとはそのデータに当該書籍の収められている段ボール箱の番号などを入力する。基本的にはこれで完了だが、実際には時間を短縮するため複数の作業者が同時進行でこの作業を行なったので、複数のリストが生成し、また各作業者の機材環境の問題などで、生成したExcelファイルの書式が不統一となっているので、それを統一・整形する必要がある。さらに、ISBNがついていない古い書籍、あるいはISBNが附されているにもかかわらず書誌データを生成できない (つまりブクログが依拠しているAmazonサイト上に書誌データが存在しない) 書籍などについては、現物を目視して手作業で書誌データを入力する。最終的にバーコードから読み取ったものも手作業で入力したものも合わせて一つのExcelファイルにまとめて完成である。

すべてを手作業で入力したら、作業時間はこの10倍ではきかなかったであろう。西澤氏がみつけてきてくださったシステムの威力は絶大であった。

5. 協力者たち

とはいえ、この半自動システムをもってしても、実際に行う作業はかなり多い。3部屋の書棚をみて寄贈に適するであろう本を選定して運び出し、或る程度の分類した上で、一冊一冊バーコードをスキャンする。データ採取が終わったら箱詰めし、箱に番号を附する。箱とデータを紐づけするために、データに箱番号を確実に入力する。作業時間が限られているため、私一人では到底できる仕事ではない。信頼できる協力者を探した。条件としては、英・仏・独語を解し (書名をみてすぐに大体の検討がつく程度の語学力が必要)、科学史・哲学などの造詣があり、書誌学・図書館学的な基礎知識を有し、データ処理の基本的な素養があること、大量の書籍を移動するので体力があること。そして、そうした実務能力以前の問題として、この作業は、亡き人の——生前そのままの仕事場の姿を保っている——研究室に立ち入って、さまざまな私物が目に触れる可能性がある仕事であり、そこに残された書物たちは、単に書籍である前に、先生の〈遺品〉である。故人と遺品に対する畏敬の念が大前提であり、若い人たちがこれから続けていく知の生産のために役立ててほしいと願って大学図書館への寄贈を希望された先生の遺志を共有して作業をしてくださるかたでなければなら

ない。誰でもよいというわけにはいかないのである。こうした条件にあう方々として、三名の友人に協力を依頼した。まず、金森先生を指導教授としてフランス現代哲学を専攻されている稲田祐貴氏（当時、東京大学大学院教育学研究科博士課程）。そして、金森ゼミOGで日本思想史や環境論などを専攻されている犬塚悠氏（当時、東京大学大学院学際情報学部博士課程）。さらに、科学史・医学史を専攻され、アーカイヴズ研究の専門知識をもつ藤本大士氏（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）。お三方のご協力はきわめて心強いものであった。稲田氏にはフランス語・哲学関係を中心に選書作業をお願いし、ISBNデータの読み取りも一部行なっていただいた。犬塚氏は情報科学の授業を非常勤で担当されていた経歴もあり情報処理方面に強いかたで、バーコード読み取りからExcelファイルの生成・整形まで、この作業の電子的工程の実務をすべて担当していただいた。藤本氏にはとくに医学史や公害・薬害研究などの方面の選書をお願いし、また、金森先生のご蔵書のうちでもとくに重要な書籍群であるフランス科学認識論関係の原書——古い稀覯な書目が多数含まれており、それらにはISBNが附されていない——の書誌情報を手作業でデータ化していただいた。稲田氏、犬塚氏、藤本氏、そして先述の西澤氏が知識と労力を提供して下さらなかつたら、この作業は絶対に不可能だったはずである。ここに明記して、四氏に感謝を申し上げたい。

6. 作業開始——Project《Ex libris》

図書館寄贈のための蔵書の選書とデータ化に先立って、最優先でしなければならない作業があった。研究室内に保管されている物品のうち、遺品としてご家族のもとにお返しすべき私物類、プライベートな性格の強い資料（金森先生が研究・授業準備のために作成された膨大なファイル類、手書きのノート類、手紙）、個人情報に関わる資料（授業・成績評価関係書類、学位論文評価資料など）の散佚・流出を防ぐため、それらを極力遺漏なく探し出し、先生のご自宅に送ることである。この作業は2016年6月6日、金森先生のご夫人、先生の盟友であった小松美彦・武蔵野大学教授、さらに田中智彦・東京医科歯科大学准教授、奥村により行なわれた。

そして、選書とデータ化の作業は6月16日、午前

9時に金森先生の研究室で開始した。私と犬塚氏は全時間にわたって作業し、途中から藤本氏が参加、そのあと稲田氏が来てくださった。空調の効きが不十分な研究室内は、複数のコンピューターが発する排熱も相まって6月とはいえ猛烈な暑さとなり、大量の書籍を移動させる重労働で、作業メンバーの体力は激しく消耗していった。私は水分と塩分の摂取に留意していたが、それでも一時、熱中症寸前の状態に陥った。当初は選書とデータ化を並行して行なっていたが、時間が押してきて、或る時点で、このペースでは終わらないことが明らかとなったので、まずは選書作業を優先し、残るデータ化作業は後日とすることになった。そこで、データ採取が終わった書籍と、図書館寄贈向けに選書してあるがデータ採取は済んでいない書籍とで分別することとした。データ化が完了した書籍の入った段ボール箱は医学部国際共同研究棟に送られ、2021年まで保管されることになる。6月16日時点でデータ化が完了していなかった書籍については、箱詰めされ医学部1号館に移送された。この日の作業は休憩をはさみながら夜更けまで続き、開始から15時間後の深夜12時に終了となった。

その後、2017年1月までかけて、私と犬塚氏による断続的な作業によって書誌情報が採取された。本稿執筆時点（2017年5月）で書誌除法の採取はすべて完了しているが、データの最終的な統一・整形にまだ若干の時間し、作業は継続中である。図書館寄贈対象となる書籍は、冊数として1700冊ほど（全集などの揃いものも1冊ずつカウントしている）、段ボール箱約60個となった。このなかから1000点ほどを図書館側が選定し、将来、総合図書館に収蔵・配架される予定である。

7. 形見分け

蔵書のうち図書館寄贈対象とするものの選出は終わった。だが、まだ1万冊以上が残っている。これらは金森先生のご家族のもとに返すことが決まっているが、ご家族のご厚意により形見分けとしてご縁のあった方々に一部をお持ちいただくこととなった。6月20日に金森先生と特に親しかった研究者の方々が研究室を訪れ、一、二冊ずつ本をお持ち帰りになった。学内関係者向けに6月21日と22日、形見分けの日程が設けられ、同僚の方々や指導を受けた

大学院生などが本を持ちかえった。そして残った書籍は奥村の立ちあいのもと、業者の手により6月28日、29日に箱詰めが行なわれ、ご家族のもとにお返しするものと、処分するものにと選り分ける作業を行なった（処分したのは、まだわずかに残存していた内部文書と、膨大なコピーの束である。コピー束のなかには貴重な文献の複写も含まれるが、あまりに量が多く、書籍と異なって扱いにくいいため、ご家族のほうでもお引き取りになれず、重要なものであっても著作権的観点から図書館寄贈も再配布もできないので、処分せざるをえなかった。書籍は一切廃棄していない）。ご家族に返すものは7月2日、業者の手により搬出され、研究室には一切のものがなくなった。空になった部屋には、金森先生の好んだコロンの香りだけが最後まで残っていた。

8. 自著と掲載誌

ところで、金森先生の研究室には、資料としての蔵書のほかに、先生が買い上げたり出版元から提供されたりした自著が大量にストックされていた。これらは各1冊ずつ先生のご葬儀のとき会場で展示され、それはのちにご家族のもとに届けられた。また7月20日に東京大学本郷キャンパス伊藤国際学術研究センターで開かれた〈金森修先生お別れの会〉の会場でも各1冊ずつ展示されたのち、大量のストックは、来場された方々に形見分けとしてお持ち帰りいただいた。

几帳面な金森先生は、ご自身の文章やインタビュー記事が掲載された雑誌や分担執筆・寄稿した論集・ムック、学会抄録、論文抜刷などもすべて研究室に保管されていた。これは段ボール箱に詰めて8個ほどの分量になった。これらは作業中にくKファイルと呼ばれるようになり、東京大学医学部1号館内の教育学部管理スペースに移動されたのち、2017年に入ってから稲田祐貴氏と山田俊弘氏（東京大学教育学研究員）の手で分析され、金森先生の詳細な業績一覧（本誌掲載）のための資料となった。また今後編纂される可能性のある金森先生の論集の底本として利用する可能性がある一部の掲載誌は、小松美彦先生のご指示のもと、奥村が預かることになった。その他のKファイルは、教育学研究科の管理のもと、当面医学部1号館で保管される予定である。

9. 背表紙の撮影

時系列は前後するが、金森先生がまだ比較のお元氣だった——すでにその頃からご病氣と闘っていらっしやっただが、先生ご自身も周囲も回復を確信していた——2015年後半頃から金森先生と相談していたことがある。当時すでに教育学部棟の耐震工事の件が決まっており、研究室の書籍をすべて一度倉庫に退避させる必要があることがわかっていた。金森先生はこの機会に或る程度本を処分したいとおっしゃっていた。私は「それならば現時点での蔵書目録を作られてはいかがですか」と提案した。そうすれば仮に処分した本でも、どういう本があったかは記録として残る。先生は「でも、それ大変だよ」とおっしゃってはいたが、耐震工事が始まる少し前の時期になったら、その作業をしようということでご諒解くださった。だが、先生の病状は徐々に悪化してゆく。先生が最後の闘病生活を送られていた2016年4月後半、この件をもう一度、相談した。本を処分するかどうかはともかく、先生がご病氣から回復され、仕事を再開されるときに、一時移動させた書籍を極力もとの配列に復元し、先生がただちに仕事を再開できるようにする必要がある。そのためにも、現時点での書籍の配列をすべて写真データで記録しましょう、と。ご病状を詳細に教えていただいていた私は、この頃には、必ずしも楽観的な見通しを描けなかったが、それでも、先生はきっと病を乗り越え復帰されるだろうという希望をもち、この提案をした。金森先生は了承され、体力が落ちていて自分ではできないから君一人でやってくれていいと、3部屋に私が入り出すことを許諾された。私は折を見て何度か3部屋に通い、すべての棚について、書籍の背表紙をデジタル・カメラで撮影した。本格的なアーカイブ作成のためであれば、照明機材を設置し、カメラの絞りや露出などを手動で細かく設定した上で、ストロボで背表紙が光ったり白飛びしたりして文字が判読できなくなるようなことを避ける工夫は行ないうる。その気になれば専門家に依頼することも可能である³⁾。だが、このときはあくまで、本の配列をおおまかに把握し、研究室再開のときにおおむねその配列を再現できればよいと考えていたため（すなわち、その書籍の持ち主の亡きあとの記録となることは想定していなかったため）、撮影はコンパクト・デジタル・カメラやスマートフォン

の内蔵カメラを使った手持ち撮影であり、ストロボの反射などは或る程度仕方なしとする（1段の棚を少しずつ角度を変えて複数枚撮影することで、反射する位置をズラして、複数の写真をみれば、1段の書名が一応すべて判読できるという程度で妥協する）方針で、約2000枚程度の写真に記録した。今となっては、刻々と変化してきたであろう金森先生の蔵書の最終形態の記録となった。これらの写真はいまだ整理されず、文字データに起こすような作業もせず、私が個人的に保有している。故人のプライバシーにかかわるものでもあるので、当面、リスト化する予定も公開する予定もない。だが、もし将来、〈金森修教授蔵書目録〉のようなものを作成するような機会があるとすれば、そのための基礎資料となるはずである⁴⁾。

10. 蔵書の全容

以上のような図書館寄贈のための選書とデータ化（および記録写真）により、金森先生の蔵書の全容が明らかになってきた。

金森先生が特に蒐集されていた分野はおおむね次のようにまとめることができる。

①科学史・科学思想史

基本的に17世紀以降、とくに18世紀～20世紀の欧・米・日を対象とする研究書、史料のリプリント版など。

②現代科学論、科学技術社会論、科学社会学

1990年代後半以降の英語文献が中心。

③医学史・医学論・生命倫理学

英語文献が多いが、薬害、スモンなど日本語文献も多数。

④哲学・哲学史

フランス哲学関係が多い。また、各国哲学についてフランス語で書かれた文献も多数。

⑤フランス科学認識論

金森先生の狭い意味での専門分野。このなかには、日本では恐らく金森先生以外に所有している人も図書館もないであろう貴重な文献が含まれる。

⑥空間論・環境論

英語文献多数、建築関係の日本語文献もかなりある。

⑦その他

文学、音楽、美術、映画などに関する本。文学者や思想家の個人全集・著作集。

先述のとおり、金森先生のご蔵書は、東大教育学部内の三箇所に保管されていた。総合図書館への寄贈の相談の段階で、私は各部屋の書架にどのような本がどのような配列で保管されていたのか、棚の見取り図も含む詳細なレポートを作成したが、その内容をここにそのまま掲載することはできない。本棚は、仮に研究室という〈職場〉のものであっても、その持ち主のプライバシーに属する性格をもつ。したがって金森先生の意を確認できなくなった今、それを不用意に公開してはならないはずだ。ここでは、部屋ごとに、蔵書のうち特色あるものの一部を、図書館寄贈対象とした書目を中心として、ごく大まかに書き留めるにとどめる。

・407室（金森先生研究室）

この部屋がいわば蔵書の本丸であり、重要な書目はほぼこの部屋に集中している。書物はすべての壁面を覆う天井までの書架にぎっしりと詰め込まれ、ほとんどの棚は前後二列に本を並べられていた。分類も比較的秩序だっている。主要な書目は以下のとおりである。

H.G.ウェルズ著作・研究書（英文原書）20冊以上。ハンナ・アレント関係（邦訳）10冊程度。フィチーノ『プラトン神学』（英訳）2巻。ヴァイスマン『進化論』（英訳、1904）2巻。エイズの歴史・文化論など（英文研究書）60冊程度。身体論（英文研究書）20冊程度。各国哲学の仏訳、フランス哲学（原書）、ガリマール社Folioなど軽装本で20冊程度。ベルクソン著作・研究書（仏文原書）10冊程度。アラン・ルノー『政治哲学史』（仏文原書）全4巻。『ジンメル著作集』（邦訳・白水社）全12巻揃。レヴィ=ストロース関係（仏文原書）10冊程度。フランス科学認識論関係（エレヌ・メッツジェ、ヴェイユマン、セール、グランジェ、コイレ、バジュラル、アトラン、バディウなど）70冊程度。カッシーラー著作・研究書（仏訳）15冊程度。ポール・ヴィリリオ著作（仏語原書）15冊程度。シェリング『啓示の哲学』（仏訳）全3巻。ラルース社の*Histoire du monde*, 3 vols. Belles Lettres社の*Figures du Savoir*シリーズ（思想家の評伝・概説シリーズ、仏語原書）10冊。死生

学・安楽死などに関する研究書（英文）50冊程度。カール・シュミット（仏訳）5冊程度。デヴィッド・ヒューム『英国史』（原書）全6巻。美術教育関係研究書（邦文）15冊程度。ドゥルーズ著作・研究書（仏文原書）70冊程度。映画論（仏文・英文原書）50冊程度。『少年小説大系』9冊（三一書房）。現代日本のSFに関する評論・研究書（邦文）50冊程度。『小松左京全集』既刊分全巻揃。アラン・ド・リベラ『主体の考古学』（仏文原書）全2巻。第一法規『日本の水彩画』全10巻、同『現代の水彩画』全5巻。20世紀美術の画集30冊程度。美学・美術史関係研究書（仏文・英文）150冊程度。ハイデガー全集（邦訳）15冊程度。音楽史関係研究書（邦文）50冊程度。モンスター（奇形・怪物）関係の研究書（英文・邦文）50冊程度。現代倫理学関係（応用倫理、生命倫理、動物倫理、死生学など）の研究書（英文）80冊程度。キュル・ポール・ジャン『ニーチェ』（仏文）全3巻。トマス・アクィナス『神学大全』（仏訳）全3巻。アルフレッド・フイエ『プラトン哲学』（仏文）全4巻。ミクロス・ヴェトー『カントからシェリングへ』（仏文）全2巻。ヴォルテール著作集（仏文）プレイヤード叢書2冊。ラヴェッソン『習慣論』ほかファイヤール社の16～19世紀フランス思想古典リプリント版8冊程度。薬害関係（邦文）30冊程度。『薬害スモン全史』全3巻。アルマタン社のピエール・ジャンネ著作リプリント版（仏文）4冊。PUFカドリージュ叢書（フランス史、戦史など、仏文）10冊程度。

・408室（共同書庫）

この部屋は研究室に次いで重要な書目、あるいはこれから先のお仕事に使うために先生が蒐集された書籍、各種の全集類などが置かれていた。棚には比較的余裕をもって本が詰められているが、分類はやや混然としている。主要書目は次のとおりである。

水俣病関係（邦文）50冊程度。平凡社『中世思想原典集成』（不揃）10冊程度。サイボーグ論関係研究書（英文・邦文）50冊程度。西脇順三郎全集（全巻揃）。筒井康隆全集（全巻揃）。海野十三全集（全巻揃）。澁澤龍彦全集（研究室保管のものと同合わせると恐らく全巻揃）。小酒井不木全集（全巻揃）。ゴシック文学関係研究書（英文）30冊程度。田辺元全集（全巻揃）。西田幾多郎全集（全巻揃）。鈴木大拙全集（全巻揃）。寺田寅彦全集（一部欠け）。宮沢賢治全集（一部欠け）。野上弥生子全集（全巻揃）。

・354室（共同書庫）

この部屋は、過去に先生が『サイエンス・ウォーズ』（東京大学出版会、2000年）や共著『現代科学論』（新曜社、2000年）などを執筆するときに使われたらしい、英語圏の科学論に関する書籍が多く、前任の東京水産大学（当時）時代のご蔵書をそのまま移動したらしい節があるものが目立った。分類は比較的小おまかで、さまざまな本やコピーの束が混然と置かれていた。主な書目は次のとおりである。

生命倫理など研究書（英文）50冊程度。西田幾多郎など日本哲学の英訳・研究書（英文）50冊程度。現代科学論、環境論など研究書（英文）50冊程度。ナチス研究書（英文・仏文）20冊程度。フランス史関係（仏文）10冊程度。新潮社『ドストエフスキー全集』（全巻揃）。エミール・ゾラの小説（原書）20冊程度。

おわりに

金森修先生が残された蔵書の主要部分は、2021年を待って総合図書館に収蔵される。その頃には現在進行中の東京大学新図書館構想〈アカデミック・コモンズ〉が実現し、改装なった本館、図書館前広場地下に建設される新館とも、稼働状態になっているはずである。金森先生の蔵書は先生の知を形作る任を終えた。それは、貪欲な読み手にして多産な書き手であった先生を支える激務であったに違いない。書物たちはまだ見ぬ図書館の書架に並び、新たな読み手を得る日を待ちながら、いま箱のなかで、ひとときの休息を得ている。

注

1) この文章を私がどのような立場から書いているかを一言しておきたい。私は2003年以来、金森先生のゼミに参加させていただき、また自主的な読書会、先生が主催する研究会、先生と一緒に参加したり運営したりした研究会その他、さまざまな場面で、13年間に亘って学恩を得た。私は先生の勤務されていた東京大学教育学部／大学院教育学研究科の出身者ではなく、いわば押しかけの弟子を長年続けたわけだが、最後の2年と少し、つまり2014年4月から2016年5月までは、日本学術振興会特別研究員(PD)として、先生に受入研究者となっていたいただき、制度的にも弟子であったことになり、先生

が2017年の4月後半、ご体調の悪化により授業継続が困難となってからは、急遽、東京大学教育学部非常勤講師に着任し、先生の授業を共担という形で引き継がせていただいた。そのようなご縁があって、先生の亡きあと、ご蔵書の整理を担当させていただくこととなり、その経緯を報告しようとしているのが本稿である。

- 2) このような扱いになることは現状では致し方ない面がある。たとえば金森先生の師の一人でもある哲学者・東京大学名誉教授、廣松渉(1933-94)の旧蔵書も東京大学附属図書館に寄贈されたが、現在は、一箇所に〈廣松文庫〉のような形でまとめられてはおらず、〈廣松渉教授寄贈〉の印を捺され、NDC分類に沿って、各分野の棚に散在している。内容分類に即した配架になっていたほうが実用面では利点があり、このような収蔵方法をとるのも(或る傑出した知性が集めた書籍がそのままひとまとまりで保全されないことは残念でもあるのだが)一つの見識であろう。逆に、或る人物の蔵書の大部分を一箇所に保存したが、その管理に問題があり、いちどきに失われたという痛ましい例が、仏文学者・京都大学名誉教授、桑原武夫(1904-88)の蔵書である。遺

族が京都市に寄贈した桑原の蔵書1万冊あまりが、2015年、当時の市右京中央図書館副館長によって無断で廃棄されていた(京都新聞web版、2017年4月27日付)。

- 3) たとえば、立花隆著・薀田純一写真『立花隆の本棚』(原書房、2013年)には、立花氏の膨大な蔵書を収めた書棚を1段ごとにレーザー墨出し器を使って計測した上で精密撮影し、全景を合成するという方法で得られた写真が多数収められている。
- 4) この種の記録は各方面で行なわれているだろう。科学論研究者の蔵書目録としては、例えば国際日本文化研究センター編『廣重徹旧蔵図書目録：国際日本文化研究センター所蔵』(国際日本文化研究センター、2002年)、天理図書館編『澤瀉久敬蔵書目録』(天理大学出版部、2002年)といったものがある。あるいは書棚の写真なども収めた、きわめて充実したものとして、伝説の仏文学者の書齋・書庫の書物を網羅した、国書刊行会編集部編『書物の宇宙誌：澁澤龍彦蔵書目録』(国書刊行会、2006年)という書籍がある。